日工組通信 第24回

日工組を構成する組合員、すなわちパチンコメーカーは現在36社あり、各パチンコメーカーには、伝統に裏付けされた特徴がある。そしてそのメーカーごとの特徴を知ってパチンコを打てば、パチンコはさらに楽しめる。シリーズ2回目は、京楽産業.、藤商事、三洋物産の3メーカーの〝素顔〟を紹介する。

京楽産業.

Kyoraku Sangyo.
Since 1961

代表機種

ぱちんこウルトラセブン 2005
ぱちんこ冬のソナタ 2006
ぱちんこ必殺仕事人Ⅲ 2007
ぱちんこAKB48 2012

ぱちんこ必殺仕事人Ⅲ
©松竹・ABC　© KYORAKU

大チャンス柄「ゼブラ柄」

大チャンス柄は「ゼブラ柄」。2003年発売の「必殺仕事人 激闘編」から搭載された。動物柄は目に付きやすいし、一目で「アッ」と感じられるから。

イメージキャラクター「たぬ吉」

1992年に発売した羽根物「たぬ吉君2」が当時、10万台を超す大ヒットとなり、そこから生まれた。「たぬ吉」は長年、プレミアムキャラクターとしても登場している。

あのメーカーのそこが知りたい！

企業理念はMORE SURPRISE「もっと新鮮な驚き」をみんなに届けたい!!

通称〝ビックリマーク〟を2つ重ねた「!!」こそ、京楽産業.のシンボルマーク。パチンコを通して喜びや発見、感動することのドキドキ、わくわくするような「SURPRISE」をファンのもとに届けたい――。「!!」はその意思表明として、演出や台枠に登場する。

〝京楽ブランド〟がより強固になったのは2000年代中盤だ。パチンコで初めて「バトル演出」を搭載した「ぱちんこウルトラセブン」（2005年）、大ヒット韓流ドラマとのタイアップ機「ぱちんこ冬のソナタ」（2006年）、人気時代劇とのタイアップ機「ぱちんこ必殺仕事人Ⅲ」（2007年）と、立て続けに大ヒット機種を連発。特に「必殺仕事人Ⅲ」は同社の歴代販売台数レコードとなる約26万台に達した。

必殺仕事人シリーズは、フラッグシップタイトルと位置づけられているだけあり、どの機種も常にプレーヤーの度肝を抜く演出を備えてきた。初代「必殺仕事人」ではハンドルが振動する「Pヴib」、続く「必殺仕事人激闘編」では盤面を光が切り裂く「閃光X斬り」、そして「ぱちんこ必殺仕事人Ⅲ」ではハンドルが光りキュインキュインと至福の告知音を響かせる「Pーフラッシュ」が、それぞれ初お目見え。結果的に、いずれもその後のパチンコの進化に大きく貢献した。

2012年には人気絶頂の国民的アイドルとコラボした「ぱちんこAKB48」をリリース。12曲の新曲が毎週1曲ずつパチンコ台から発表されるという驚きの仕掛けも話題を集めた。

企業理念である「MORE SURPRISE（もっと新鮮な驚きを）」実現のため、ファン目線で、妥協せずに何度でも作り直す機械作りが、ファンから愛される理由だ。

京楽産業.は、これからも極上のエンターテインメントを、そしてサプライズ（!!）をファンに届け続けてくれるだろう。

大チャンス柄「ゼブラ柄」

大チャンス柄は「ゼブラ柄」。2003年発売の「必殺仕事人 激闘編」から搭載された。動物柄は目に付きやすいし、一目で「アッ」と感じられるから。

イメージキャラクター「たぬ吉」

1992年に発売した羽根物「たぬ吉君2」が当時、10万台を超す大ヒットとなり、そこから生まれた。「たぬ吉」は長年、プレミアムキャラクターとしても登場している。

藤商事

FUJISHOJI CO.,LTD
Since 1966

代表機種

アレジン 1992
CRリング 呪いの七日間（シリーズ） 2012
パチスロ リング 呪いの七日間 2014

大チャンス柄「デンジャー柄」

大チャンス柄は「デンジャー柄」。2008年に発売されたCRジュラシックパークMAXのデンジャー枠が好評であったことがきっかけ。その後、「危険度が高い＝アツい」というコンセプトのもと、デンジャー柄とデンジャー音を採用し、現在に至る。

イメージキャラクター「アタック藤丸くん」と「藤香ちゃん」

イメージキャラクターは「アタック藤丸くん」と「藤香ちゃん」。藤商事にしかないプレミア感を出すには最適とプレミアムキャラクターにも採用されている。

アレジンから本格ホラーまで独創性に満ちた機種開発が伝統

パチンコ台とプレーヤーの顔をへだてる距離は、わずか数十センチ。その近距離で、いきなり「手」が目の前に現れる。その奥からは、こちらを凝視する人の目。それは純粋に、怖い！。そんな圧倒的な恐怖演出を武器に、「CRリング　呪いの七日間」（2012年）で7万台を超えるヒットを飛ばした藤商事。開発にあたっては、ゲーム性を知らない社員が打ってビクッとしたかどうかを基準にした。

リングシリーズを筆頭に「オーメン」「呪怨」「着信アリ」「仄暗い水の底から」など、ホラーコンテンツとのタイアップ機をリリースし続けているだけに、〝本格ホラーパチンコのメーカー〟という印象が強い。

しかし、実際には時代や作りこまれた演出が特徴でもある同社だが、オールドファンにとってはシンプルかつ豪快なイメージも広いコンテンツを扱っていて、オリジナル機や萌え系の機種でも高い評価を得ている。また「CR「エキサイト」「アレンジマン」などは1990年代前半のホールを彩った。「ピュイ」という音と7セグの回転のみで当時のファンを熱狂させた。

現在にいたるまで他社にはない独創性が受け継がれているのは、コーポレートスローガンである「ヒト味違う〝オモシロ〟さ！」を実践しているからこそ。「図柄が揃ったら当たる、という機械まかせではなく、今までにない新しいゲーム性を実現したい」と意気込む同社だけに、今後もあっと驚く機種が登場しそうだ。

CRリング運命の日
©1999鈴木光司 発行:株式会社KADOKAWA　角川書店　©1998「リング」「らせん」製作委員会　©FUJI SYOJI

三洋物産

Sanyo Group
Since 1968

代表機種

CR海物語 1999
CR大海物語 2005
CRスーパー海物語IN沖縄 2007
CRスーパー海物語INJAPAN 2015

大チャンス柄「魚群柄」「クマノミ柄」

大チャンス柄は「魚群柄」「クマノミ柄」。魚群柄は海物語で最も象徴的な予告である魚群をモチーフにした柄で、クマノミ柄はその予告で採用している魚の種類クマノミをモチーフにした柄だ。

イメージキャラクター「クジラッキー」「マリンちゃん」

イメージキャラクターは「クジラッキー」と「マリンちゃん」。クジラッキーは初代から海物語のロゴの部分にずっと存在はしていたが、2009年のスーパー海物語IN地中海から演出にも登場し、瞬く間に人気キャラクターになった。「マリンちゃん」はパチンコを遊技しない人にも認知度が大変高いキャラクターだ。

オリジナルタイトルにこだわり 海物語シリーズは誕生から17年

もしかしたら、パチンコを知らない人が唯一知っているパチンコ台は「海物語」かもしれない。機種名こそ知らなくても、そこに登場するキャラクターの「マリンちゃん」はどこかで見ているかも……。もちろん、老若男女を問わずパチンコファンで知らない人はいないだろう。おそらく誰でも一度は海物語シリーズを打ったことがあるはずだ。そんな傑作シリーズを生み出したメーカーが、三洋物産だ。

業界初の「横スクロール5ライン」という斬新さとシンプルなゲーム性が人気を集めた「ギンギラパラダイス」（1995年）が礎となり、1999年に初代「CR海物語」が誕生した。さらにはシリーズで初めて確変と時短の両方を搭載した「CR新海物語」（2002年）、シリーズ初の選べる3モードを搭載した「CR大海物語」（2005年）と海物語の系譜は続く。

パチンコの中に海物語があるのではなく、パチンコとは別に「海物語」というカテゴリーがある、と言われるシリーズだけに、その偉大さは改めて説明するまでもない。しかし強調できるのは、17年もの長い年月の時代の変化の中で、不変と変化を共存させている、という点だ。シンプルなゲーム性、「魚群」のアツさ、親しみやすい魚の図柄は変わらない。大当りを祝福する告知機能や液晶演出は常に進化する。その結果として、ファンから愛され続けている。また、オリジナルタイトルに最もこだわりを持つメーカーでもある。「大工の源さん」「わんわんパラダイス」などのシリーズは古くからのファンも多い。今後も「第二の海物語」となる新たなオリジナル機の開発や育成、さらにはドラム機や7セグ機、羽根物などの非液晶機の開発に注力する姿勢を示している。

三洋物産は、パチンコのさらなる進化や発展、そしてファン人口増加に、今後ますます貢献するだろう。

CRスーパー海物語INJAPAN
©SANYO